

主編 林岫

中國漢俳百家詩選

林岫題



綫裝書局



主编 林岫

中國漢俳百家詩選

林岫題



綫裝書局



图书在版编目 (C I P) 数据

中国汉俳百家诗选 : 汉日对照 / 林岫主编. — 北京 : 线装书局, 2013. 12
ISBN 978-7-5120-1156-4

I . ①中 ... II . ①林 ... III . ①汉俳—诗集—中国—当代—汉、日 IV . ① I227

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2013) 第 287031 号

中国汉俳百家诗选

主 编: 林 岫

责任编辑: 高晓彬

装帧设计: 尚文菊

出版发行: **线装书局**

地 址: 北京市西城区鼓楼西大街 41 号 (100009)

电 话: 010-64045283 64041012

网 址: www.xzhbc.com

经 销: 新华书店

印 制: 北京奥美彩色印务有限公司

开 本: 700mm×1000mm 1/16

印 张: 20.5

字 数: 105 千字

版 次: 2013 年 12 月第 1 版第 1 次印刷

印 数: 0001—2000 册

定 价: 58.00 元

《中国汉俳百家诗选》

主 编 林 岫

顾 问 刘德有 袁 鹰 屠 岸

日 译 郑民钦等

编 委 会 刘德有 林 岫 袁 鹰 屠 岸

郑民钦 李佩云 吴瑞钧 胡星光

书名题字 林 岫

序

汉俳—中国的诗苑新花

中国汉俳学会会长、前文化部副部长

刘德有

林岫女士主编的《中国汉俳百家诗选》付梓问世，是中国汉俳界的一件盛事和喜事。

记得 1995 年，受时任中国佛教协会会长赵朴初先生的委托，林岫女士曾主编过《汉俳首选集》（青岛出版社 1997 年 5 月出版）。如果说《汉俳首选集》是当时汉俳诗人作品的初步展示，那么这本《中国汉俳百家诗选》就是在汉俳作者队伍扩大后的今天一次作品大检阅。本书不仅收录了在汉俳创作上成绩斐然的资深汉俳老诗人或专家的作品，而且还收录了许多活跃于当今俳坛的中青年汉俳诗人的近作。尤其令人高兴的是，本书特别收录了 27 位日本诗人创作的汉俳。在这个意义上，本书应该说是中日两国诗人合作的成果。

“汉俳”是上世纪八十年代初在中日文化交流中产生的类似小令的新诗体，其形式如同日本的俳句。如今，人们提到汉俳的创始者，当首推著名诗人、佛教学者赵朴初，并很自然地谈及 1980 年 5 月大野林火等日本俳人访华事。当时两国诗人和文学翻译家进行交流时，赵朴初在会上诵读了仿照日本俳句——上中下 5、7、5 三句共 17 音的形式，遂以 17 个汉字按 5、7、5 三行成为汉语俳句——“汉俳”，并且首次使用了“汉俳”一词：

绿荫今雨来，
山花枝接海花开。
和风起汉俳。

其实，这首汉俳并非赵朴初先生创作的第一首汉俳。我发现，在《赵朴初

韵文集》中有一则注解，他写道：奈良东大寺清水公照长老在一次宴会上，“诵其在扬州所作俳句，译员口译其意，余依俳句格律改为汉文云：‘遍地菜花黄，盲目圣人归故乡，春意万年长。’此余为俳句之始。用汉文写俳句，或是余首创，余名之曰‘汉俳’。”这首首创“汉俳”的诞生，从时间上说也是1980年5月，但要比大野林火等人访华稍早一些。

三十多年来，在中国（包括香港地区在内），“汉俳”作者和爱好者日益增多。不仅各地报刊经常登载“汉俳”作品，而且陆续出版了一些汉俳集。

汉俳在我国兴起若干年后，我这个不擅韵文的人也附各位名家骥尾开始学写汉俳。虽然写的不多，但在这一过程中也有些思考，有所感悟。

我觉得“汉俳”，跟日本俳句一样，也要抓住瞬间的感怀和意象，以简约的文字含蓄地抒发丰富的感情。但是，中国和日本在民族传统、文化背景及语言结构等方面毕竟不同，所以表现形式自然不会一样。目前，“汉俳”除了字数和节奏外，尚无固定的要求：文字可文可白，韵脚可有可无（能押韵更好），平仄不论，季语使用也很随意。但尽管如此，“汉俳”与俳句一样，其本质都是诗。既然是诗，就应当有诗意。没有诗意，就失去了生命。如果仅仅把汉字排列成5、7、5三行，即使押了韵，充其量也只能是标语口号或“顺口溜”。

汉俳创作要不要不断创新？文学艺术，向来贵创新。当然，汉俳亦不例外。汉俳通常被认为是格律诗，字数和节奏有定式，有时还要讲究平仄和韵脚，所以容易被当作“旧瓶”。其实，它既是“旧瓶”，也是“新瓶”。我认为，格律并非不要，而是不要使它成为囚禁思想与情感的镣铐。依我个人的体会，对于旧的东西，我们也要讲辩证法，既要学古，又不泥古。我认为写汉俳要立意新，有时代感，有生活气息，要形象性强，富有创意。

有人说，既然是汉俳，就要有“俳味”，也要有“中国味”。

何谓“俳味”？从日本俳句的发展史来看，在室町时代（1392-1573）末期兴起的“俳谐连歌”，具有诙谐、滑稽、卑俗等特点，并常常含有讽刺。日本的“俳谐连歌”，正是为了摆脱早期的“和歌”、“连歌”的严谨格律，用平易的口语来描写诙谐洒脱的题材应运而生的。但是，到了江户时代的元禄时期（1688-1704），俳圣松尾芭蕉来了一次革命，把俳谐提升到具有高度

文学艺术性的境界，形成了以芭蕉为核心的蕉门俳人集体形成的“蕉风”——“幽玄”、“枯寂”、“余情”、“深邃”。芭蕉对俳谐的革命，归结为一点，就是把汉诗、“和歌”、“连歌”等文学的美融合起来，创造出一种抒情诗般的俳谐美，所以芭蕉的“滑稽”不再引人发笑，而是站在更高的层次上透视自我的诙谐（参见郑民钦著《日本俳句史》）。这就是我们所说的“俳味”。

对于“俳谐”、“俳味”，我认为似乎宜全面地、辩证地、发展地加以理解和考察。当我们说到“俳味”时，不能片面地强调“诙谐，滑稽、讽刺”，还应强调“幽玄”、“枯寂”，甚至“含蓄”、“风雅”。一句话，要使我们写出的汉俳具有“枯寂”的意味。而这种“枯淡”，并非日本独有。我注意到，清朝乾隆年间的诗坛领袖沈德潜所总结的古诗审美传统之一，就是“古澹”，即“古淡”。他说：“味则泊乎不觉其甘也，格则浑乎不觉其奇也。音则冷冷乎不觉其倾耳动听也”（《乔慕韩诗序》）。这一见解是很耐人寻味的。

我个人觉得，一方面我们要承认“闲寂”、“枯淡”等确实是日本人传统的美学意识，但另一方面又不能把它们绝对化。它们既是日本的，又跟中国人某些生活情感、情趣和文学欣赏习惯有相通、相似之处，甚至等无差异。以我之见，这种美学观在很大程度上受了中国的易、孔、老、庄、禅特别是禅的影响。是否可以说，《易经》开其源，孔、老、庄畅其流，禅宗助其势。这一切，对日本人形成崇尚“幽玄”、“闲寂”、“枯淡”的审美观，无疑起了很大的作用。正因为上述日本人的美学观与中国的理念有相通之处，所以中国人在尊重传统的基础上写出的汉俳，完全可以做到具有“俳味”。对于“俳味”，似乎也不必刻意去追求。中国人写汉俳的目的并不一定是要写出日本人的情趣，而是要相互交流，相互沟通，通过借鉴日本俳句的诗型来吟咏中国人的情怀，这才是问题的关键。

历史地来看，中国的诗歌也是在古今中外大交流中不断推陈出新、互相借鉴而发展和繁荣起来的。汉俳承古开今，综博而约，植根于中国，又接受日本俳句的影响，即是一个鲜活的例证。现在在我们的诗歌百花园里多一个“汉俳”的新品种，它短小精悍、节奏活泼，既可以咏物，也可以寓情，既可以写出纤细柔弱、恬静淡泊的作品，又可以写出慷慨高歌的佳作，这岂不是给广大汉俳

作者和爱好者开辟了一片广阔的天地吗？

我相信，本书的出版定能够对我国新时期进一步推动汉俳事业的发展和促进中日两国文化交流起到积极作用。

本书在付梓前，林岫女士嘱我写点什么。恭敬不如从命，恕我拉杂漫笔，为此短文，以塞其请，并衷心祝贺本书在中日邦交正常化 40 周年之际，与广大读者见面。

序

漢俳—中国の詩壇の新花

中国漢俳学会会長、元中国文化部副部長

劉徳有

林岫氏編纂および監修による『中国漢俳百家詩選』がこのほど出版の運びとなったことは、中国漢俳詩界の重要な出来事であり、まことに喜びにたえない。

たしか1995年だったと記憶しているが、当時中国仏教協会会長の任にあった趙樸初氏の依頼を受けて、林岫氏編纂および監修による『漢俳首選集』（青島出版社1997年版）が上梓されたが、この選集の位置づけを、漢俳詩人たちのそれまでの作品の初歩的なデモンストレーションとするならば、ここにお届けする『中国漢俳百家詩選』は、漢俳作家の隊列が大きくなった今日、漢俳作品のオンパレードであると言えよう。本書には、漢俳創作のうえですばらしい成果をあげられたベテランの漢俳詩人や専門家たちの作品ばかりでなく、現に俳壇で活躍している中青年の漢俳詩人たちの近作も収められている。

また、27名におよぶ日本の詩人の創作漢俳が収録されたことは、とりわけ喜ばしい。その意味では、本書は中日両国詩人の合作による成果であると言ふべきであろう。

「漢俳」とは前世紀の80年代の初期に、中日文化交流のなかで生まれた、中国で「小令」と呼ばれる短詩の形に類似した新詩体であり、形式は日本の俳句に似ている。現時点で漢俳の創始者について語るとき、人々は著名な詩人、仏教学者の趙樸初氏の名を真っ先に上げるであろうし、1980年

5月の大野林火氏らの中国訪問に話が自然に及ぶのもうなずける。そのとき、両国の詩人と中国の日本文学翻訳者のあいだで交流が行われたが、趙樸初氏は席上で、俳句の5、7、5あわせて17音の形に似せて、漢字で5、7、5あわせて17文字の中国語の俳句を作り、そのなかで「漢俳」という言葉をはじめて使った。

緑陰今雨来

山花枝接海花開

和風起漢俳

こんう
緑陰 今雨来る

山花の枝 海の花に接ぎて開き

和風 漢俳を起す

実のところ、この漢俳は趙氏の創作した最初の漢俳作品ではない。このことは、偶然にも、『趙樸初韻文集』を読んでいたそのことに触れた注釈を発見して初めて知った。それによると、事実是这样である。奈良東大寺の清水公照長老が宴席で、「揚州にて作りし俳句を、翻訳者に意味を訳させたが、余は俳句の形式に従い、それを『遍地菜花黄、盲目聖人帰故郷、春意万年長』と漢文に改めむ。これ即ち余の俳句の始めなり。漢文による俳句の創作は、あるいは余が最初かも知れぬ。余はこれを名づけて『漢俳』と称す。」時間的に言えば、これも1980年5月のことであるが、大野林火氏らの訪中の時期よりやや早い。

三十年余りこのかた、香港地区を含めて中国における漢俳の作者と愛好者は日増しに増え、各地の新聞・雑誌等に漢俳作品が常時掲載されるようになったばかりでなく、漢俳のアンソロジーも次から次へとお目見えしている。

漢俳が中国で流行りだしてから数年後に、韻文に不得手な私も有名作家の驥尾に付して勉強し始め、作品はさほど多くはないが、漢俳を作る過程のなかで感じたり気がついたりすることがあり、ここで若干述べてみたい。

思うに、漢俳は俳句と同じく、瞬間に捕らえた感慨や印象を洗練された一句に含蓄を持たせ、嫋嫋たる余韻を残しながら豊かに表現することが要求される。しかし、中国と日本は、畢竟民族の伝統、文化的背景や言葉の仕組

みが異なり、表現形式もおのずと違ってくる。今のところ漢俳は、字数とリズムの点を除いて、文語体と口語体のいずれでも良し、脚韻は踏んでも踏まなくても良し（踏めばなお良い）、平仄はやかましくなく、季語の使用も自由、といったように固定した要求はまだない。にもかかわらず、漢俳は俳句同様、本質的にはどちらも詩である。詩である以上、詩情がなければならない。詩情がなければ、生命力を失ってしまう。仮に漢字を5，7，5の順に三行並べて韻を踏んでも、それはせいぜい標語かスローガン、もしくは語呂の良い「あほだら経」のようなものにほかならない。

漢俳の創作は、当然、新機軸を生み出す必要があるだろう。文化芸術はつねに創意性が重んじられるが、それと同じように、漢俳も例外ではない。通常、漢俳は字数やリズムに定式があり、平仄や脚韻などが要求され、一定の形式をそなえた詩であると見なされているので、「旧き器」と考えられがちだが、その実、漢俳は「旧き器」であると同時に、「新しき器」でもある。形式は不必要ではなく、それが思想や感情を束縛する刑具になってはならないと考える。個人的な体験だが、古いものに対しては、学ぶ姿勢とともにこれに囚われないという弁証法的な態度が望ましい。漢俳を作るに当たっては、着想が新しく、時代性と生活の息吹が感じとられ、しかも形象性と創意性のあるものを目指すことが求められるのではなかろうか。

漢俳である以上、「俳味」が必要であるばかりか、「中国味」がなくてはならぬ、と人は言う。

「俳味」とは何か？ 俳句の発展史を見ると、室町時代（1392－1573）の末期ごろに起こった「俳諧連歌」は、諧謔、滑稽、卑俗などの特徴をそなえ、時には風刺も含まれるが、「俳諧連歌」はほかでもなく、早期の「和歌」や「連歌」の厳しい形式から逸脱し、平易な口語を駆使して、諧謔洒脱な題材を表現するために生みだされたものだと言われている。しかし、江戸時代も元禄（1688－1704）に入るや、俳聖・松尾芭蕉によって革命が引き起こされ、俳諧は高度の文学芸術性を持った境地に引き上げられ、芭蕉を中心とする蕉門の俳人たちによる「蕉風」——「わび」「さび」

「しをり（余情）」「まこと」などが提唱されるようになった。俳諧に対する芭蕉の革命は、要するに、漢詩、和歌、連歌などの美が融合されて叙情的な俳諧の美が作り上げられたという一点に帰することができるのではなからうか。したがって、芭蕉の「滑稽」は可笑しさを通り越して、むしろさらに高い次元から自我を透視する諧謔へと発展したといわれている。（鄭民欽著『日本俳句史』を参照）われわれの言う「俳味」とは、まさにこのことを指しているのではないかと思う。

持論であるが、「俳諧」と「俳味」に対しては、全面的に、弁証法的に、しかも発展的にこれを理解し考察するのが好ましい。「俳味」について語るとき、ただ一方的に「諧謔、滑稽、風刺」を強調するのではなく、「わび」「さび」のほか「含蓄」「風雅」も強調すべきであろう。要するに、漢俳に「枯淡」（さび）の味を持たせることが大事である。「枯淡」は、日本独特のものであるかという点、さにあらず。現に清・乾隆時代の詩壇のリーダー沈徳潜が総括した中国古代詩の美の伝統のひとつが、「枯澹」即ち「枯淡」である。沈徳潜の残した言葉に「味則泊乎不覺其甘也、格則渾乎不覺其奇也。音則冷冷乎不覺其動聽也（句の味は淡泊にして、奇をてらさず、音は清らかなるも、人におもねることはせず）」（『喬慕韓詩序』）とあるが、吟味に値する見解であると言えよう。

個人的な見方だが、「わび、さび」「枯淡」などはたしかに日本人の伝統的な美意識であることを認める必要があるが、しかし、これを絶対視するのはどうかと思う。それは、日本的であると同時に、中国人の生活感情、趣味、心情や文学の鑑賞習慣などの面で相通ずるものがあるか、もしくは類似しており、なかにはまったく同じものもある。このような美意識は、中国の易経、孔子、老子、莊子の影響とりわけ禅の影響を受けて形成されたという見方があるが、易経に源を発し、孔子、老子、莊子に至って大きな流れを形成し、禅によって勢いづけられたのではなからうか。これらのものが日本人のたつとぶ「わび、さび」の審美観を形成する上で大きな役割を果たしてきたことは疑いない。上に述べた日本人の美意識と中国人の理念との間に相通ずるも

のがある以上、中国人が伝統を重んじて創作した漢俳に、「俳味」を持たせることは十分にでき得ると思う。「俳味」は別に腐心して追求するまでもなからう。中国人が漢俳を書くのは、必ずしも日本人の感情や趣味を表現するためではなく、相互に交流しあい、俳句という詩形を借りて中国人の心情を謳いあげるのが目的であり、ここに問題の鍵があるのではなかろうか。

歴史的に見て、中国の詩歌も古今中外の交流の中でたえず新機軸を生み出し、互いに学びあいながら発展し繁栄してきたと言えよう。伝統の継承を基礎に、新しい分野を切り開き、先人の成果を広く吸収して、中国の大地に根を下ろす一方、日本の俳句からも影響を受けて育ってきた漢俳は、その生き生きとした何よりの証拠であろう。現在、中国の百花園に漢俳という新しい詩形が仲間入りをし、短いながらもリズム感があり、もろもろの事物や人々の感情が詠みこまれ、細やかな淡々とした作品のみならず、悲憤慷慨なものまで書けるという点で、広範な漢俳作家や愛好者にとって広々とした天地が開かれたと言えよう。

本書の出版は必ずや、新しい時期に入った中国の漢俳事業の発展および中日両国の文化交流の促進に積極的な役割を果たすに違いないと信じて疑わない。

林岫氏から、本書の上梓に当たって何か書いてほしいとのご依頼があった。お言葉に甘えて、とりとめもないことを書き連ねて責めを塞ぐこととしたい。

この本が中日国交正常化40周年に広範な読者のお目見えできたことを心から祝福して、搁筆。

（作者自译）

贺词

日本现代俳句协会会长

金子兜太

欣闻林岫女士主编的《中国汉俳百家诗选》即将出版，与1997年《汉俳首选集》出版一样，不禁令我回想起随1980年的第一届俳人访华团首次访问北京的情景。当时由大野林火先生任代表团团长，我们日本俳人数十人抵达北京机场时，受到了林林先生的热烈欢迎。当日的晚宴上，赵朴初先生等几位中国诗人朗诵汉俳，欢迎我们。这是我第一次接触到汉俳。这个值得纪念的夜晚给我的感动至今难以忘怀。

坦率地说，包括当时的印象以及其后的一段时间内，我对于中国诗坛的核心人物所追求的、将汉俳作为群众性的诗歌能够普及到何种程度，存在一定的疑问。我想，汉俳可能会仅仅停留在知识分子的范围内吧。

但是，在其后将近二十年的时间里，我通过与林林先生等中国汉俳诗人的接触，感到上述想法完全是多虑的。赵朴初先生、林林先生为了将汉俳推广成为群众性的诗歌作出了巨大努力，并得到了众多的支持。我记得，一次在举行中日汉俳、俳句交流会时，负责筹备大会的吴瑞钧女士不顾高烧住院的病体，赶到会场，主持了大会。

2005年，中国汉俳学会正式成立，由刘德有先生任会长。我感到无比喜悦，出席了成立大会。不仅是我，我的许多俳句友人，当时在北京访问的有马朗人以及致力于诗词创作和研究的葛饰吟社前主宰中山荣造和代表理事今田述二人也出席了成立大会。

而且，葛饰吟社的朋友们对汉俳的热情也十分高涨。这次出版的《中国汉俳百家诗选》共收入二十七人日本诗人的作品。我想在天之灵的赵朴初先生、林林先生也会感到由衷的喜悦。愿汉俳能如赵朴初先生所期望的那样，成为两国文化交流的友谊之桥。

（吴瑞钧译）

祝辞に代えて

——日本現代俳句協会会長

金子 究太

林岫女史主編「中国漢俳百家詩選」が出版されると聞いて、一九九七年の「漢俳首選集」のときと同じように、第一回俳人訪中団に参加して北京の地を初めて踏んだ一九八〇年のことを思い出していた。日本の俳人数十名が、大野林火氏を団長として北京空港に着くと、林林氏の力強い出迎えを受けた。その夜のパーティでは、趙樸初氏をはじめ数人の詩人が漢俳を読み上げて歓迎してくださった。初めて漢俳に接した記念すべき夜で、あのときの感銘は今でも消えない。

ただ、そのときの印象を含めて、その後しばらく、中国詩壇中枢が求めていると聞いた国民詩としての漢俳ひろがり、どこまで可能か、私には疑問だったことも事実である。知識人の範囲に止まるのではないか、ということ。

しかしそれから三十年余り、林林氏をはじめとする中国漢俳人との接触を通じて、それが忌憂だったと承知するようになった。趙樸初氏や林林氏の国民詩に向かつての民衆化の努力には並々ならぬものがあり、両氏を支える人たちの努力にも熱気があった。たしか中日交流の漢俳俳句大会の時だったと記憶する。設営の軸になっていた呉瑞鈞さんが、風邪の高熱で入院中の病院から駆けつけて、開幕の辞を堂々と述べたこともあった。

二〇〇五年の、劉徳有氏を会長とする漢俳学会の設立は、当然の成果と私は喜び、創立祝賀会に参加した。私だけではない。私の俳句仲間も多数参加し、北京滞在中の有馬朗人氏も出席した。更に詩詞の製作と研究をつづけている葛飾吟社の中山榮造（元主宰）、今田述（代表理事）両氏も出席した。

ちなみにこの吟社の人たちの漢俳への情熱には、並々ならぬものがあり、今回の「中国漢俳百家詩選」にも、中山榮造氏と今田述氏はじめ二十七名日本人の作品が入集している由である。亡き趙樸初氏も、林林氏も喜んでおられることと思う。漢俳が趙樸初先生のご期待のように、中日文化交流の架け橋になることを祈って止まない次第である。

目录

序 汉俳—中国的诗苑新花

（刘德有）----- 1

贺词（金子兜太）---- 1

作者（按年齿排序）

锺敬文（6首）----- 2

赵朴初（6首）----- 4

林 林（6首）----- 6

公 木（6首）----- 8

杜 宣（6首）----- 10

黄树则（6首）----- 12

海 稜（6首）----- 14

陈大远（6首）----- 16

邹荻帆（6首）----- 18

李 芒（6首）----- 20

徐 放（5首）----- 22

蓝 曼（5首）----- 24

屠 岸（6首）----- 26

袁 鹰（5首）----- 28

赵乐甡（6首）----- 30

丁 芒（6首）----- 32

瞿 麦（6首）----- 34

欧阳鹤（6首）----- 36

罗 洛（6首）----- 38

纪 鹏（6首）----- 40

丘仕俊（6首）----- 42

李佩云（6首）-----44

周克玉（6首）----- 46

陈明仙（6首）----- 48

夏湘平（6首）----- 50

高 勇（6首）----- 52

刘德有（6首）----- 54

冰 夫（6首）----- 56

林育鸿（6首）----- 58

晓 帆（6首）----- 60

冯溢载（4首）----- 62

谷 威（6首）----- 64

茹 桂（6首）----- 66

董耀章（6首）----- 68

东 白（6首）----- 70

卢祖品（6首）----- 72

林东海（5首）----- 74

刘景泉（4首）----- 76

顾子欣（6首）----- 78

王 渭（6首）----- 80

陈明远（6首）----- 82

赖育芳（6首）----- 84

王大均（6首）----- 86

旭 宇（6首）----- 88

屈仲诚（6首）----- 90

刘春海（4首）----- 92

米正阳（6首）----- 94